



◆ センター長報告 ◆

日本社会と一神教

一神教学際研究センター（CISMOR）は、一神教を主たる研究対象としている。そして、その研究にはいくつかの特徴があるが、本誌前号でも述べたように、その一つは学際的な研究である。すなわち、ユダヤ教・キリスト教・イスラームといった一神教に対する個別の研究を橋渡しし、相互の関係づけや、新たな研究を促す「学際研究」をCISMORは目的としている。そのため、CISMORは単に神学的・宗教学的な研究にとどまらず、国際政治、地域研究、安全保障、グローバル・スタディーズなどの専門家を交えて、研究の学際性と多様性を拡充してきた。



こういった研究の基本姿勢に加え、まだ十分とは言えないが、CISMORが担っている別の課題がある。それは一神教研究の成果を日本社会に伝え、同時に、日本の宗教・文化を一神教世界に伝えることである。歴史をさかのぼれば、日本社会は16世紀にカトリックと初めて接触し、カトリックは広範囲に受容された時期もあったが、最終的には激しい弾圧の下に、その伝統はほぼ途絶することになった。19世紀の開国以降、プロテスタントの新たな参入と共に、日本はあらためて西洋文明や、キリスト教をはじめとする一神教と対峙することになった。戦前においても、すでにユダヤ教に対する強い関心が見られ、一部には反ユダヤ主義と言える動向もあった。また、東南アジアをも含んだ日本の植民地政策の中で、イスラームとの関係は重要な役割を占めていた。

このように振り返ってみると、日本社会と一神教とはすでに数世紀に及ぶ接触の歴史を持っていることがわかる。しかし、ユダヤ人・クリスチャン・ムスリムは日本社会では今なお圧倒的なマイノリティであるため、私たちの日常生活において、そうした人々と出会う機会は少なく、それゆえ、今なお一神教が十分に理解されているとは言い難い。むしろ、世界の各地で継続している地域紛争やテロなどの事件において、一神教が関与しているということが表層的に報道されることによって、誤解や偏見が広がっている側面の方が大きいと言えるだろう。

たとえば、本年1月に起こった、アルジェリアの天然ガス施設への襲撃事件において「イスラーム過激派」という言葉が繰り返し用いられた。武器を持って施設を襲い、人命を奪ったのであるから、彼らが過激な武装集団であることは間違いない。しかし、この種の言葉が多用されることによって、テロに及ぶような集団がごく一部の例外的存在であったとしても、「イスラームは過激だ」という印象を拡散させていくことになる。テロを抑止することは現代社会の課題の一つであるが、ただ一方的に敵対心をあおり、その背後にある問題の広がりを見ようとしなければ、解決は遠のくばかりであろう。



CISMORは問題解決の直接的な手順を示すわけではないが、少なくとも問題を単純化してしまおうとする誘惑に抵抗することのできる知見を提供し続けたいと考えている。日本の論壇では「多神教」対「一神教」というステレオタイプな対比も繰り返されてきた（詳細は拙著『宗教のポリティクス』第4章参照）。日本の伝統を寛容な多神教的文化として称賛し、一神教を排他的な思想として批判することは、あまり生産的な議論と言えないばかりか、グローバル化する世界の中で日本を文化的に孤立させることにもなりかねない。日本の宗教や文化は、一神教世界との対話や信頼関係構築を通じて、そのユニークな貢献を世界に発信することができる。そのためにもCISMORは、日本宗教・文化と一神教世界との橋渡しをする役割を担いたいと考えている。

（一神教学際研究センター長 小原克博）

◆ 公開講演会・シンポジウム・研究会報告 ◆

公開シンポジウム

イスラームと西欧近代の問題 ― 共約不可能性と共存可能性を突き詰める

講 師：内藤 正典（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授）
 中田 考（アフガニスタン平和・開発研究センター客員上級共同研究員）
 コメンテーター：見原 礼子（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科助教）
 塩崎 悠輝（同志社大学神学部助教）
 モデレーター：小原 克博（同志社大学神学部・神学研究科教授、CISMORセンター長）
 日 時：2012年9月15日（土）14:30-17:30
 会 場：同志社大学室町キャンパス 寒梅館ハーディホール

9月15日、CISMOR公開シンポジウム「イスラームと西欧近代の問題」が開催された。シンポジウムは内藤正典氏と中田考氏の講演を中心とするもので、西洋のモデルをイスラームに適用することの不可能性を確認しつつ、欧米社会とムスリムの共生の可能性を探る機会となった。

内藤氏は「イスラームと世俗主義―共約不可能性から共生への模索」と題して講演した。はじめに内藤氏は、この主題に関わる具体的争点として、スカーフ論争、アフガン問題、シリア問題をあげた。内藤氏によれば、中でもスカーフ論争において、イスラームと世俗主義の共約不可能性は顕著である。世俗主義国家は、私人の宗教的表象を公的領域に持ち込むことを否定する。フランスでは公的な場所に宗教的なシンボルを持ち込むことを禁止する法案も成立した。そこで意識されているのはムスリムのスカーフであるが、ムスリムにとってスカーフは宗教の表象ではない。ここで議論が完全に食い違っている。



次いで内藤氏はより原理的な争点を提示した。第一の争点は法である。世俗主義国家における至高の法は人の法（憲法）だが、ムスリムにとっては神の法である。第二の争点は国民国家である。覚醒したムスリムは、国民とナショナリズムに基礎をもつ国民国家を拒否しつつある。第三の争点は世俗主義と進歩史観である。西欧諸国は、世俗主義にたつ国家制度の成立を「進歩」、イスラーム的制度を「時代遅れ」と見なす。しかしムスリムは近代思想を否定し始めている。これらのゆえに、ムスリムに近代西欧的モデルを押しつけても、対立が深まるだけである。

最後に内藤氏は共生の可能性について言及した。内藤氏によれば、1) 西欧もムスリム社会も、近代西欧を擬制した国民国家建設が限界にきたことを認識すること、2) 西欧は論理的に整合しない「争点」を提示してムスリム社会を挑発するのをやめること、3) 西欧は主権国家の論理によって他者を侵略・支配しようとしないうこと、4) ムスリム社会は、疑似西欧近代国家の導入で生じた夾雑物を、正しいイスラーム的論理によって除去・変更し、イスラーム的な統治システムの構築を目指すこと、以上四点に目途をつけることが、共生の前提であるという。

つづけて中田氏が、「全ては政治、全ては宗教」という題で講演した。中田氏によると、イスラームはしばしばいわれるような意味での「政教一致」ではない。すべての中心にあるのは神だが、社会機能は早くから分化していた。スンナ派の理解によれば、預言者ムハンマドの死後、絶対的な権威をもった人物は存在なくなり、支配者は世俗の事柄を決めるだけになる。

この意味でイスラームは早い段階で「政教分離」していた。ただ、「政教分離」のあり方が西洋とは異なるのである。



また中田氏によれば、新聞等で「イスラーム」といわれているものと、真のイスラームは別のものである。たとえばムスリム同胞団やイスラーム諸国会議機構は、イスラーム的ではなく、むしろ反イスラーム的である。イスラームは、現実のムスリムの行動とは関係なく、神の意志として客観的に存在する。では、イスラームとは何か。それは神への服従である。純粋な一神教であるイスラームは、神ならざるものに従うことを拒否する。しかし現代においては、国家への服従がもはや慣習化し、人々は無自覚のうちに国家に従うようになっている。出生届が典型的に示すように、今日では人々の生のすべての領域が国家の管理の下にある。これは新しい状況である。

こうした状況がある以上、現代においては国家を否定しないかぎり、真のムスリムになることはできない。いいかえると、現代世界では、政治を離れてイスラームはありえない。イスラームを守るためには、イスラームが政治を変えるほかない。以上のように力説することによって、中田氏は講演を締めくくった。

また内藤氏、中田氏による講演の後、両氏に見原礼子氏、塩崎悠輝氏を加えた四名により、パネルディスカッションが行われた。なお当日は200人近くが来場し、関心の高さをうかがわせた。

（CISMOR特別研究員 杉田俊介）

第6回CISMORユダヤ学会議

(日本・イスラエル外交関係樹立60周年記念事業)

ヘブライ語文化の復興 ―現代ユダヤ教における意義・日本文化との関係 The Revival of Hebrew Culture in the Context of Modern Judaism and in Relation to Japan

共催:同志社大学神学部・神学研究科

後援:駐日イスラエル大使館

映画上映会

“*The Human Resources Manager*” (A.B.イエホシュア原作、エラン・リックリス監督、2010年イスラエル)

講 演:三宅良美(秋田大学教授) 「語ること、語らないこと:イスラエル映画・日本映画」

質疑応答:アブラハム B. イエホシュア(イスラエル人作家)

日 時:2012年10月5日(金) 18:00-20:30

会 場:同志社大学室町キャンパス 寒梅館クローバーホール



本年度のユダヤ学会議はヘブライ語文化に焦点を当て、A.B.イエホシュア原作の映画“*The Human Resources Manager* (人事課長)”の上映を中心とした前夜祭から始まった。上映に先立ち、三宅良美氏による現代イスラエル映画史についての講演がもたれた。

1970年代、イスラエル映画はその自由な作風でアカデミー賞に何度もノミネートされ、2000年代になると再び国際的な舞台に名を連ねるようになる。かつては主に一部の知識階級の描く芸術作品やエキゾチックなコメディを映画のテーマとした。今は、普通の人々が過去や現在を見つめながら、自分を取り戻す、自分を語り直す過程を描く作品に脚光が当たった。すでに伝統を築き上げた山形国際ドキュメンタリー映画祭において、イスラエルは最も積極的な映画産出国である。例えば、アビ・モグラヴィは映画“Z32”で、ミュージカル・ドキュメンタリー・悲劇という、まるで関係のない三つの要素を一つにした。主人公の青年はイスラエルの特殊部隊としてパレスチナ警官を報復のために殺害しており、罪悪感に苛まれる。アイデンティティを明かして謝罪をすることが出来ない、青年のジレンマを彼の恋人も理解しようとする。二人の顔にアニメーションのマスクが施される。元青年兵士の語りとモグラヴィの事件に対する苦い思いが交互に入れ替わり、さらにモグラヴィは自宅で室内楽団を作って歌を歌うことによって、ジレンマを表現する。この表現方法は会場に集まるドキュメンタリー作家たちを感心させた。監督自身の独白によって自己探求を描く方法は、今日のイスラエル映画の特徴の一つであるが、これまでのところ女性の独白的な映画は少ない。不器用で孤独なテル・アビブの女性を主人公とした、“*Jellyfish*”などが代表的な作品であり、恋愛や結婚、近代社会の孤独の問題を扱う。イスラエル映画は、シオニズム宣伝、建国のプロセス、ホロコーストの記憶といった、ナショナリズムに関わるテーマから移行し、個人的体験、成長過程において当然のように存在する悩みを描くようになった。今回の“*The Human Resources Manager*”も、生と死を扱った一人の中年男性の自分探しの物語として、三宅氏は理解する。

上映会では、エルサレムのパン工場に勤務する人事課長の姿に脚光を当てる“*The Human Resources Manager*”が上映された。工場に外国人労働者として勤務した女性が自爆攻撃の犠牲者となり、彼女の状況を把握していなかった工場は非人道的であると、新聞社に批判される事態となる。新聞社の批判をかわすため、工場側の代表として、女性の遺体を故国ルーマニアへと送り届けることを命じられた人事課長は、この旅路で様々な人々に出会い、人間性を問われる状況に直面する。映画は旅路における人事課長の内面の変化を、ふんだんなユーモアを交えつつ描く。

上映後、イエホシュア氏より作品についての説明がなされ、質疑応答があった。第二次インティファダにおける自爆攻撃により、イスラエルとパレスチナの両社会が一般市民の死に対して無慈悲となりつつある際に、イエホシュア氏は作品の執筆を思い立った。お役所的な態度だった人事課長がこの女性の死に深い感情を抱く人間へと変わっていく姿を、映画は的確に描写する。この変化が原作の強調点だったと質疑応答で明らかになった。

(同志社大学神学研究科博士後期課程 平岡光太郎)

公開講演会

イスラエルのアイデンティティ: 神話から歴史へ

講 師: アブラハム B. イエホシュア(イスラエル人作家)

日 時: 2012年10月6日(土) 13:00-15:00

会 場: 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル



アブラハム B. イエホシュア氏の講演は、文学的な視角からユダヤ人のアイデンティティに関して広範に考察したものであった。

イスラエルではシオニズム史の教授法に関して議論が交わされている。2000年以上にわたるユダヤ人のアイデンティティを支えてきた神話を破壊せずに歴史研究を行なう事は可能か、という問いがハアレツ紙に掲載されている。アイデンティティには、歴史に依拠するものと神話に基づくものという二つの在り方が考えられる。ユダヤ思想家、ゲルショム・ショーレムは「シオニズムとは歴史への帰還である」と述べた。ユダヤ人の歴史はシオニズム以前にも存在していたため、彼の発言は奇妙なものである。だがユダヤ人は神話の中にこそ存在していたと言える。

ロラン・バルトによると、神話とは「世界そのものではなく、世界がこうなりたいという理想を受け入れること」である。ギリシアでは、神話は神（々）との関係を通して人間と世界の出来事を説明しようとする事であり、真実そのものではない。神話には歴史的真相を超越する場合と、現実ではない想像したものを指す場合の正反対の意味があり、神話が宗教との繋がりを持つ所以である（例：イエスの磔刑）。

ユダヤ人は民族よりも宗教的なものへの帰属意識の方が強く、地理的に隔たった環境においても神話を通してアイデンティティが共有された。神話はスーパー・ストーリーの役割を担う場合がある。紀元前580年、第一神殿がバビロニアによって破壊され、紀元後70年に第二神殿がローマにより破壊された。二つの事件の間には600年という時間的隔たりがあり、神殿崩壊に至る政治的状況も全く異なるものであった。元来、神殿崩壊を嘆く儀式が個別に行なわれていたが、後に一つの祭日となった。もはや歴史的定義ではなく、「崩壊」という概念が二つの出来事を結びつけ神話として記憶を新しくする例である。二例目は、イエシバー（ユダヤ教神学校）の学徒によるマイモニデスの受容の仕方である。彼らはマイモニデスの文書に関する豊富な知識を有する一方、彼の思想に影響を与えた背景（アリストテレス、イスラーム等）に関する歴史的な知識は乏しい。これも一種の神話となっている例である。

神話により、ユダヤ人は自らの境遇に左右されずアイデンティティを保つ事ができた。ユダヤ人は常にエジプトを脱出した民族として自分たちを理解してきた。出エジプトの出来事が史実であるかどうかは重要ではない。また、メシアの来臨時、キリスト教の救済はそれぞれの地で達成されると考えられるが、ユダヤ教の贖いは祖国（イスラエルの地）でなされると考えられている。だが祖国の概念自体が神話的なものであった。

神話に依拠するアイデンティティはむしろマイナス面で強力に作用した。歴史（土地）に依拠するアイデンティティに基づかなかったため、ユダヤ人は世界中を放浪する存在として理解されるようになり、その存在自体が神話化するという大変危険なものとなった。約三分の一のユダヤ人がナチスにより犠牲となったが、ナチス自体が神話的アイデンティティに依拠していた。だからこそ、シオニズムは歴史への帰還だと言える。

講演の後半、イエホシュア氏はユダヤ人が自らの歴史小説を記述することは記録の少なさ故に困難な作業である事を指摘した。文学を含む芸術は歴史を再度描く事であると述べ、歴史を覆い隠すことがある神話に対して立ち向かう必要がある、と作家としての自らの使命について語った。

（同志社大学神学研究科博士後期課程 大岩根安里）

非公開研究会

ヘブライ文学：作家と研究者

講 師： 「シオニズム再興におけるヘブライ作家の立場」 「作家と批評家 ― 個人的証言」 「A.B. イエホシュアの『マル・マニ』について」	アブラハム B. イエホシュア（イスラエル人作家） ニツァ・ベン・ドヴ（ハイファ大学教授） 村田靖子（東邦大学教授）
日 時： 2012年10月6日（土）16:00-18:00	
会 場： 同志社大学今出川キャンパス 神学館G31教室	

A. B. イエホシュア氏は公の場での作家の役割に関して、特にイスラエルの作家に着目し、自身の見解を述べた。作家の公共における役割とは、社会問題全般やナショナルな問いを社会に提示することにある。近代シオニズムが作家らによって形成された点は重要である（例：T・ヘルツルはジャーナリストであった）。

次に重要とされるのは、イスラエルの作家はユダヤの伝統的な役割を継承する立場にあることである。ヘブライ語聖書に見られるイザヤ等の預言者は時の権力、また大衆に対して批判的な見解を述べ、彼らの行動を正そうとした。今日のイスラエル作家はこのような預言者の姿を担うべきである。一般的に作家にはモラルが求められる。また他者への理解のために想像力を通じた多様な視点をもつ必要がある。最後に第一に市民として、第二に作家として積極的に社会へ関与する重要性を述べた。

続くニツァ・ベン・ドヴ教授の報告は、比較文学研究者としての教授の博士論文の主題を決定するに至る過程、およびカリフォルニア大学の当時の雰囲気や学問の流行に関する事等、多岐にわたる個人的な体験談を初めて語った貴重なものであった。

イスラエルにおける著者と読者との関係性を紹介するにあたり、“And It Is Your Praise”（2006年）を出版した時のエピソードを披露した。当時面識のなかったドロン・コヘン氏からEメールで同著に関する豊かで建設的なコメントを受け取ったことはドヴ教授にとって喜ばしいものであった。また作家であるA. B. イエホシュアやアモス・オズとの個人的な交流についても述べた。両者はドヴ教授の解釈に同意する事は稀であり、度々厳しい批判を行なうが、それが私的な交流に影響することはないという。イエホシュア氏の近著“Spanish Charity”が自伝小説ではないにも関わらず、内容を吟味した上でドヴ教授は

“Written Loves” (2011年)の著書で“Spanish Charity”を自伝小説のジャンルに含めて出版した。これに対しイエホシュア氏との私的な会話から、ドヴ教授の試みが承認された出来事を紹介し、報告の締めくくりとした。

村田靖子名誉教授の報告は、イエホシュア氏の作品“Mar Mani (Mr. Mani)” (1990年)の重要性を指摘するものであった。同作品は、六世代にわたるスファラディに出自を持つマニ家の系譜を辿る物語である。物語はマニ家の男たちを中心に展開され、いずれの世代も家系が途絶える危機に直面しながらも、かろうじて男児を授かり、マニ家の家系は居住地を変えつつ次世代へと受け継がれていく内容である。この小説のユニークな点は以下の三点に集約できる。一点目は物語が年代順とは逆に展開されている点。マニ家の家系の物語は、第一話、1982年のキブツから始まり、最終的に第五話はアテネ(1848年)まで遡る。年代順に反した物語の展開はイエホシュア氏が精神分析の手法を文学に取り込んだ試みである。二点目の特徴は、「アケダー」(イサクの犠牲)のモチーフを用いている点である。三点目は、エルサレムを中心に物語が展開している事である。



“Mar Mani”はイスラエルにおけるアシュケナジー中心の歴史記述の陰に潜んだスファラディの歴史を描いた作品である。この点で同作品は現代イスラエル文学において異彩を放っている。現代イスラエル文学の要点は「多様性」であるが、“Mar Mani”はまさにイスラエル社会の多様性を描いた記念碑的な作品と言えるだろう。

以上の三氏の報告後には、作家のシオニズムへの立場、エルサレムの帰属問題などを中心に活発な議論が展開された。

(同志社大学神学研究科博士後期課程 大岩根安里)

非公開研究会

日本におけるヘブライ文学とユダヤ学

講師：「オデッサからヤッファへ：19世紀以降のヘブライ文学の発展」

高尾千津子 (立教大学教授)

「イスラエル建国以前の現代ヘブライ文学におけるユートピアと反ユートピア」

赤尾光春 (オックスフォード大学客員研究員)

「『私は誰?』サイイド・カシューアの小説における失われたアイデンティティの探究」

細田和江 (中央大学政策文化総合研究所準研究員)

日時：2012年10月7日(日) 9:00-12:00

会場：同志社大学今出川キャンパス 神学館G31教室

会議最終日の午前中には、高尾千津子氏、赤尾光春氏、細田和江氏が発表した。高尾氏の発表は、ユダヤ人啓蒙運動(ハスカラー)に言及しつつ、近代ヘブライ文学の展開を明らかにした。18世紀末のベルリンでヘブライ語新聞“Ha-Me’aseef”が発行された。これは、イディッシュ語の日常使用の中、聖書の言葉であるヘブライ語による文学(世俗文学)をハスカラーが開始したことを意味する。こうして18世紀末のプロイセンで始まったハスカラーは、19世紀になると、東欧、ロシアへとその中心地を移動した。帝政ロシアにおけるヘブライ文学発展に重要な役割を果たしたのは、“Ha-melitz”などの定期刊行物だった。同紙はヘブライ語作家の登竜門であると同時に、ロシア国内を中心とした様々な事件も報じた。19世紀中葉の代表的な著述家である、アブラハム・マプーとモシェ・リリエンブルムの作品は、ロシアのユダヤ人青年層、特に伝統的教育を受けた青年に広く受け入れられた。マプーの『シオンへの愛』は、ハスカラーの思想や自然回帰を教えた。マプーの次世代にあたるリリエンブルムは、前世代の主張するハスカラーの未来像、教育によるユダヤ人改革の可能性に疑問を抱く。彼の著作『青春時代の罪』は、青年時代の神存在への疑問を扱ったことによりユダヤ教の権威から禁書とされた。1881年にポグロム(ユダヤ人迫害)が起こり、これを契機にハスカラー思想は廃れる一方で、ヒバト・ツィオン運動などのシオニズムの先駆けが生まれた。こうしたヘブライ文学の展開にとってオデッサは重要地であった。しかし、ヘブライ作家集団がオデッサ港を出港しヤッフォへ向かったことにより、ロシアでのヘブライ文学は終焉を迎えた。質疑応答では、港町オデッサが何故重要になったかなどが問題となった。



赤尾氏は、近代ユダヤ系文学のユートピア小説の系譜に見られる「ユダヤ国家」像の発展を概観しつつ、そこに共通して見られる「他者」の不在を指摘した。「どこにもない場所」という意味のユートピアは、トマス・モアによる同名の小説以来、世相風刺や社会改革を主眼とする空想物語という含みを濃厚に持つ。これに対し、シオニズムの進展において創造された「ユダヤ国家」というユートピアは、後に現実の存在になったという点で、社会運動史上はもとより、世界文学史上においても特異な位置を占める。1885年に出版されたエドモンド・アイズラーの『未来像』では、主人公の青年が祖父の姿に象徴された伝統的ユダヤ教の受動性からの決別を宣言し、パレスチナの地に誕生した新生ユダヤ王国の王位につく。また1892年に発表されたエルハナン・レイブ・レヴィンスキーの『2040年、イスラエルの地への旅』は、大地との絆の回復やヘブライ文化の復興といったロ

シア・ハスカラーの流れを汲んだユダヤ人入植者の世界観を反映した作品である。最も有名なユダヤ・ユートピア小説であるテオドル・ヘルツルの『古き新しき土地』では、パレスチナのユダヤ社会が、最先端の科学技術に立脚した一大貿易拠点となり、市民的平等の原則と寛容の精神に裏打ちされた多文化共生も実現させる。これらのユートピア小説は、模範的理想国家、「他者」への寛容、平和を説くが、「アラブ人問題」を扱わない。赤尾氏は、ユートピア論における利他主義の普遍的主張が、往々にしてナショナリズムの利己的な権利主張を隠蔽する可能性をもつ、と注意を喚起する。質疑応答では、ユダヤ・ユートピアの特徴が問題となった。

細田氏は、イスラエルにおけるアラブ人の文学を概説し、特にサイイド・カシュアアのヘブライ語小説に見られる特徴を明らかにした。1948年のイスラエル建国に際し、パレスチナの多くのアラブ人が祖地を追われ難民化した。とりわけ知識人層の喪失によって文化的活動が大打撃を被り、イスラエル政府の軍政によりアラブ人の活動は大幅に制限された。こうした状況下、マフムード・ダルウィーシュらの「アラブ人」詩人による、イスラエルのパレスチナ占領に対する抵抗詩は、大衆に人気を博した。1966年、キリスト教徒であるアタッラー・マンスールの『新たな光のもとで』が刊行され、アラブ人初のヘブライ語小説として話題となった。特に焦点が当てられたカシュアアは、アラブ人の町ティラに生まれた。ヘブライ大学で社会学と哲学を専攻し、その後、フリーのジャーナリストとして活躍した彼は、2002年に『踊るアラブ人』の刊行により、ムスリムとして初のヘブライ語作家となった。この作品は、匿名の主人公のアラブ人への憎悪とユダヤ人への盲目的賞賛を全体に散りばめつつ、ユダヤ人とアラブ人の双方を集団名詞で描くことにより、登場人物の個性が失われる様子を提示する。匿名性と集団化の手法はカシュアアの特徴の一つである。また彼は、『ヘルツェルは真夜中に消え』において、昼にユダヤ人であるが、真夜中にアラブ人へと変貌する主人公を描く。前の世代とは異なる言語観と作品世界を描いたカシュアアであるが、「宙ぶらりん」で非現実的な状態を描く点で、エミール・ハビービーのような先達のイスラエル・アラブ人作家の系譜に位置づけることが出来る。質疑応答では、ポスト・コロニアル文学との比較、同化問題などが話題となった。

(同志社大学神学研究科博士後期課程 平岡光太郎)

公開講演会

ヘブライ文化：言葉と遍歴の世界

講師：ニッツァ・ベン・ドヴ（ハイファ大学教授）
 挨拶：ニシム・ベンシトリット閣下（駐日イスラエル特命全権大使）
 日時：2012年10月7日（日）13:30-15:30
 会場：同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館礼拝堂



2日目に行なわれた講演において、ニッツァ・ベン・ドヴ教授は、ヘブライ文化の形成や特徴がヘブライ語およびユダヤ人を取り巻く歴史状況に依拠していることを検証した。

ヘブライ文化の歴史は神の言葉の指示と共に始まったと考えられる。また言語の担い手が「放浪の旅」をするという点がヘブライ文化の特徴である。ユダヤ人の文学は常にその土地の影響を受けてきた。ディアスポラにおいて、ユダヤ人はユダヤ・アラビア語、ラディーノ、イディッシュなどの方言を生み出したように、口語としてはそれぞれの土地の言語を改良していった。聖なる言語としてのヘブライ語は書物の中でのみ存在した。

ユダヤ史家、シモン・ドゥブノフは世界に遍在するユダヤ人の状況、また永遠の民であることを表すものとして、「アム・オーラム（世界／永遠の民）」（ヘブライ語：Am Olam）という言葉を紹介した。

中世のスペインではユダヤ・アラビア語で多くの哲学的、宗教的書物が生み出された一方、詩に関しては全てヘブライ語で記されていた。その後、イタリアのヘブライ詩が啓蒙主義に影響を与え、18世紀末、ドイツの啓蒙主義を通して、19世紀初頭のオーストリア、ロシアでヘブライ文化が繁栄した。ここに現代ヘブライ文学の礎が築かれた。文学者ベンジャミン・ハルシャヴによると、ユダヤ人は「死んだ言語」（文語としてのヘブライ語）を保存させてきたため、共通のアイデンティティを喪失する事はなかった。ディアスポラ的な考え方の特徴は、特定の土地、国、言語に愛着を持たない事である。しかし一部のユダヤ人の中で現世的な文化また国への憧れを抱く者が現れ、その表出としてヘブライ語が再度用いられ始めた。世俗的動機から生じた近代ヘブライ文学においてヘブライ語は、宗教的書物であるタルムードを元に復元された。1853年、初の近代ヘブライ文学として、アブラハム・マブーの“The Love of Zion”が出版された。これは聖書の話断片的に収集したものであり、口語としてのヘブライ語は未だ用いられていなかった。

ヘブライ語による散文を初めて発表したのは、シャローム・ジェイコブ・アブラモヴィッツであった。“Shem and Japheth on the Train”という小説は1890年に執筆された。出版当時、まだヘブライ語でTrainに相当する言葉は存在せず、後にヘブライ語でTrainは“rakevet”と呼ばれる事になる。小説の中で、列車は国外追放されたユダヤ人を象徴するものとして用いられた。列車という新たな交通手段は魅力的なものであり、放浪の民を描くうえで効果的なモチーフであった。ユダヤ文学において列車、駅というモチーフは出会いと別れ、移動の象徴として多用されるようになった。その他、数百万人のユダヤ人を死へともたらしたホロコーストの象徴としても間接的に用いられた。他方、次世代のA. B. イェホシュアは、列車に新たな意味を付加した。彼の作品は1948年に建国されたイスラエルの存在を疑わないサブラ世代の縮図とも言える。ある山に囲ま

れた土地に夜行列車が通過するという話は、放浪するユダヤ人から新たな世代の幕開けを示唆したものである。

最後に、バベルの塔の話に出てくる「一つの言語」（創世記11:6-8）とは、おそらくヘブライ語だったと考えられる。もし神が一つの言語の使用を恐れていなければ、今日の世界はヘブライ語が人類の唯一の言語となったのではないか。

（同志社大学神学研究科博士後期課程 大岩根安里）

非公開研究会

日本語からヘブライ語への翻訳

講 師：「日本文学をヘブライ語に翻訳すること・出版すること：傾向とエピソード」

ドロシ・B・コヘン（同志社大学講師）

「日本語をヘブライ語に翻訳することの苦悩と喜び」 ミハル・ダリオットブル（ハイファ大学助教）

日 時：2012年10月7日（日）16:00-18:00

会 場：同志社大学今出川キャンパス クラーク記念館CL25教室

まずコヘン講師の報告は、日本文学のヘブライ語訳の出版にまつわる歴史を論じたものであった。日本文学に関するヘブライ語訳の出版数は、現在81冊にのぼる。1940年代から80年代までの日本文学の翻訳状況は、『むかし話』（1944年）を除き、すべて第二外国語（英語、ドイツ語）からヘブライ語へ翻訳されていた。

1980年代になると、禅に精通した学者Yoel Hoffmann、また夏目漱石や遠藤周作の小説を翻訳したことで知られているYaacov Razが原作からの翻訳作業に貢献した。80年代になると原作からの翻訳数は二桁へと増加し、2000年以降、10年間で32冊も出版されている。これは「村上シンドローム」との関連が考えられるだろう。村上春樹の『ノルウェイの森』を日本語からヘブライ語に訳した事でも知られているコヘン講師の指摘によると、イスラエルでは村上春樹のヘブライ語訳は日本語からの翻訳に先んじて、英語訳からの翻訳本が出版される場合が多い。村上の作品以外には、川端康成やよしもとばなな、詩の分野では松尾芭蕉や小林一茶などの古典作品に加え、谷川俊太郎や俵万智などの現代作品もヘブライ語訳が出されている。イスラエルにおいて、日本文学は多様なジャンルにわたり翻訳作業が行なわれてきたのに比べ、日本でのイスラエル文学の翻訳作業は極めて少ない。母袋夏生といった優れたヘブライ語翻訳家が存在するものの、小説、政治的エッセイ、児童文学を含めても、出版数は未だ限定的である。また、文学こそ各文化を理解するための最良の手段であるとするコヘン講師は、イスラエルと日本のより良い交流を築くうえで、さらなる良質な翻訳を生み出す必要性を訴えた。

続いてブル助教の報告では、翻訳時の問題が扱われた。翻訳は概して原作の隠喩を完全に喪失してしまう。対抗策として翻訳技法の駆使が必要である。しかしそれでも翻訳に関しては様々な問題が付きまとう。「良質な翻訳」とは翻訳される言語においてテキストを書き改める作業である。つまり読者が翻訳を読む際、訳語が自然に受け取られることである。

日本語からヘブライ語に翻訳する場合、以下の事柄が問題とされる。1) 意味が幾通りにも解釈できる場合。2) 固有の慣習や概念。この場合は註を用いることにより問題は解決される。また本文中に短い説明を挿入する事で解決される問題もある。3) 独特の表現。4) 短歌のもつ五句体を保つ事。5) タイトルの含意を維持すること。6) 第二外国語の翻訳を経由しないこと。例えば、村上春樹の『神の子供たちはみな踊る』に収録された短編『かえるくん、東京を救う』に出てくる、かえるくんの「くん」が英語訳では欠落しているのに対し、ブル助教は「くん」を欠落させるとその文章が持つ面白みに欠けるという理由から、「くん」をそのままヘブライ語訳に残した。

翻訳を巡る議論は尽きない。ブル助教は最後に、「良質な翻訳」を心がけると矛盾するが、翻訳文学はそれが外国語の文学であるという「異質」な感覚を読者に抱かせる事も大切である、と指摘した。

両氏による報告の後、作家、翻訳家、研究者各自の立場から多岐にわたるトピック（良質な翻訳の産出、文学の在り方、原作と翻訳の関係など）について活発な議論が交わされ、イスラエルと日本の国交60周年を記念する会議として相応しい締めくくりとなった。

（同志社大学神学研究科博士後期課程 大岩根安里）



国際会議 in イスタンブール

Conflict Prevention in the Middle East: Searching for Alternative Ways

主催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科、一神教学際研究センター
在イスタンブール日本国総領事館

会議の全体目標

本会議は、中東の紛争緩和に向けた新たな方策と展望を探ることを全体目標に据え、文部科学省の助成による三カ年プロ

ジェクト「中東の紛争防止：学際的研究の構築」（2010年4月～2013年3月）の成果発表を目的に開催されたものである。会議では日本、イラン、トルコ、アラブ諸国の著名な研究者が発表を行い、以下の四つのセッションのテーマが取り上げられた。1) 「長期化する紛争における人間の安全保障：パレスチナとアフガニスタン」、2) 「紛争緩和のために非国家主体が担うべき役割：より包括的な制度構築に向けて」、3) 「湾岸地域の安全保障」、4) 「紛争の波及の防止」。

日 時： 2012年11月8日（木）13:00-17:00 / 11月9日（金） 9:00-17:40

会 場： トルコ、イスタンブール旧総領事館事務所

基調講演： Open Civilization: Towards a New Diversity Management Strategy

講演者： Recep Senturk, Director General and Dean of Graduate Studies, Fatih Sultan Mehmet Vakif University

Session 1: Human Security in Protracted Conflicts: Palestine and Afghanistan

発表者： Ahmet Han, Assistant Professor, Kadir Has University
Kenji Isezaki, Director of Peace and Conflict Studies, Tokyo University of Foreign Studies
Azzam Tamimi, Director of the Institute of Islamic Thought
Philipp Amour, Assistant Professor, Fatih University
Ozlem Demirtas Bagdonas, Assistant Professor, Fatih University

基調講演： Security and Development Nexus in the Emerging New Middle East

講演者： Norman Cook, Former Executive Policy Director in Charge of the Middle East and Africa/ Advisor to the Project
“Conflict Prevention in the Middle East”

Session 2: Preventing the Spillover of Conflicts

発表者： Ozlem Tur, Associate Professor, Middle East Technical University
Abuomohammad Asgarkhani, Director of the Center for Graduate International Studies, University of Tehran
Azuolas Bagdonas, Lecturer, Fatih University
Yoshiyuki Kitazawa, Professor, Kyoto Sangyo University
Elisa Montiel Welti, JSPS Scholar, Doshisha University

Session 3: Security in the Gulf

発表者： Satoru Nakamura, Associate Professor, Kobe University
Hisae Nakanishi, Professor, Doshisha University
Nursin Atesoglu Guney, Professor, Yildiz Technical University

Session 4: The Role of Non-state Actors in Conflict Mitigation toward the More Inclusive Systems

発表者： Kota Suechika, Associate Professor, Ritsumeikan University
Iyas Salim, Graduate Student, Doshisha University
Oguzhan Tekin, Graduate Student, Fatih University

Recep Senturk “Open Civilization: Towards a New Diversity Management Strategy”
(開かれた文明：新たな多様性管理戦略に向けて)

多文化主義が叫ばれる昨今、新たな多様性管理のあり方を探ることが一段と大きな重要性を帯びている。複数の文明と多様な社会集団が混在する今、そして将来に向けて、平和的共存を実現するための新たな戦略が求められている。そのためには、人々が違いを乗り越えて向き合い、協働するための前向きな方策を模索することが必要である。ムスリムが多様性の管理に長けていることは歴史が証明している。イスラームの政体がムスリムだけの共同体を構築しようと試みたことは、かつて一度もなかった。それどころかムスリムは、アンダルシアからインドに至るまで、多様な文化的背景を持つ人たちが共に暮らす開かれた文明を築いてきたのである。それが可能になったのは、重層的な世界観を持ち、アーダミーヤの原則を実践してきたからに他ならない。

アーダミーヤは、イスラーム法の下で権利と義務を付与するための基本原則とされる概念で、すべての人間は、性別、人種、宗教、階級、国籍、民族といった先天的、後天的違いにかかわらず、ただ人間であるという理由だけで不可侵的な存在であると説く。アブ・ハニーファを始祖とするこの伝統は、オスマン帝国と現トルコ共和国におけるイスラームを普遍主義的視点から解釈するための基盤となっている。またイスラーム的観点に基づき、現代社会で新たな多様性管理を実践するための法的根拠を提示している。

多様性を原則とする世界では、アーダミーヤの思想に基づいた新たな多様性管理戦略が必要になる。またそのためには、同胞と他者を完全に区別するという発想ではなく、絶対的価値観と相対的価値観が多重的な枠組の中で共存するという重層的な世界観を持つことが求められる。思想やディスコースの構造が重層的であれば、学問上あるいは神学上の見解が一致しなかつ



たとしても、それが社会的紛争や政治的紛争に発展する恐れはない。このような多様性管理戦略を打ち出すことができれば、個人も共同体もそれぞれが自らの違いと統一性を内包しつつ、グローバル社会の共通の利益に資することが可能になる。

Session 1: Human Security in Protracted Conflicts: Palestine and Afghanistan (長期化する紛争における人間の安全保障：パレスチナとアフガニスタン)

セッション1の前半では、アフガニスタンの復興と安全保障部門改革をめぐるトピックが取り上げられた。まず混乱するアフガニスタン情勢と、他の国際的主体の役割、ならびにアフガニスタンにおけるその利害についてAhmet Han氏が詳しい解説を行った。同氏によると、中国は、インドとその核兵器開発計画、およびカシミール問題との関係でアフガニスタンを重視しており、またイスラーム主義がこの地域に蔓延して域内の中国の影響力を減じることに警戒感を抱いているという。アフガニスタンは中央アジアへの玄関口であり、目下欧米諸国と中国の利害が集中する勢力地域の要衝である。この事実がアフガニスタンの重要性を決定づけている、と氏は説明する。

伊勢崎賢治氏は、武装解除（DDR）の役割と安全保障部門改革の課題を取り上げ、DDRのプロセスとこれからの改革の課題について詳しく検討した。また国境を越えて活動し、時が経つにつれ戦略や利害がどんどん変わる移動集団の武装解除がいかに困難であるかという問題を論じた。さらにカシミールの重武装地域など、国境を越えて広がる対立の深刻さ、この地域の反政府集団の存在、そしてこの地域に対する国際社会の関心の薄さにも触れた。

セッション後半では、「アラブの春」以降のイスラーム教徒の役割とアラブ・イスラエル紛争、ならびに昨今のトルコ・イスラエル関係の悪化がテーマとなった。このセッションで特に大きな関心を集めたのがイスラーム集団の役割、中でもハマスとイスラエルの関係である。この問題に関してAzzam Tamimi氏が、上記集団による事実上のイスラエル承認の可能性について論じるとともに、対立する双方が交渉の席につくためにはエジプトなどが仲介役を務めることが必要であるとの指摘を行った。同氏は次いで、アラブ地域の他のイスラーム集団の役割に言及し、その中でもムスリム同胞団がアラブ地域で抜きん出た存在感を示しており、現在徐々にその勢力範囲を拡大している現状について説明した。また「アラブの春」以降のパレスチナのデモに触れ、そのルーツには二通りあることを指摘した。氏の説明によると、一部のデモが分裂の解消を求める民衆の声に端を発しているのに対し、パレスチナの一連のデモは、この地域の民衆が共通して直面する経済的苦境に触発されたものだという。

Asgarkhani氏は、イランの核兵器開発疑惑がこの地域の勢力図に及ぼす影響について解説した。氏の見解では、イランが核兵器を保有すれば、イスラエルは早晩、より対等な立場でイラン、アラブ、パレスチナと交渉を持とうとするだろうという。

Ozlem氏はトルコとイスラエル間で続く緊張関係の性質とその背景で働く力について述べ、次のように論じた。トルコにはアラブ諸国とイスラエルの仲介役を務める力があるが、イスラエルとの関係を悪化させるような事態に関わるつもりはさらさらしない。トルコの立場はあくまでも国の威信に立脚したものであり、両国間の緊張は高まっているように見えるものの、これ以上エスカレートするとは考えにくい。

Norman Cook “Security and Development Nexus in the Emerging New Middle East” (台頭する中東における安全保障と開発の結合)

「安全保障」という概念が「人間と開発」に軸を移しつつある今、激動する相互依存的なグローバル環境を背景に、今新たな現実が姿を現そうとしている。新しい安全保障観は、経済、食糧、保健、環境、人、共同体、政治的安全、価値観の安定等の領域にまで及び、そこからわき起こった様々な要求が「アラブの春」と総称される民衆蜂起に火をつけたのである。中東・北アフリカ（MENA）地域にとっては、この新たな安全保障観と、国防を中心とする従来の安全保障観を結合することがとりわけ重要である。



MENAの人口の二大特徴である「成長」と「移動」抜きには、この問題を論じることはできない。MENAの人口は世界二番目の早さで増加しており、国内外の人口移動も盛んである。この地域から流出した多くの移民が、MENAの政治や経済の未来に直接、間接に影響を及ぼしている。この二大特徴が、開発と安全保障の領域に膨大な課題と機会をもたらしているのである。

MENA地域の人口動態の変化は、人間の安全保障にかかわる様々な重要局面に影響を及ぼしている。具体例としては、少数民族の流出に伴う文化的多様性の喪失、開発レベルの格差を伴う急速な成長、天然資源の乱用に起因する環境破壊、食糧不足、重要資源をめぐる国家間の緊張の高まりなどが挙げられる。こうした課題と重ね合わせて、新しい持続可能な開発戦略に無職の若者や貧困層を取り入れることの必要性が叫ばれている。MENA地域の安全保障を脅かす懸念事項として最後に挙げられるのは、今も続くシリア内戦であり、内戦が拡大して中東全域を巻き込んだりグローバル規模の影響を及ぼしたりすることである。つまりより広い意味での安全保障を確保し維持することが、この地域の短期的、長期的な運命を大きく左右する。

Session 2: Preventing the Spillover of Conflicts (紛争の波及の防止)

シリア紛争と中東地域への影響

シリア危機は、以前から顕在していた宗派間分裂を一層深めるとともに地域的連携を強化し、「新たなアラブ冷戦」のきっかけを作った。その結果、近隣諸国が紛争に巻き込まれる危険性が増大し（例：レバノン）、正統性の基盤が揺るがされ（例：ヨルダン）、権力の限界が露呈される事態に至っている（例：トルコ）。宗派間対立の様相を帯びたこの紛争は、政府のみならず、社会や国家主体、非国家主体・集団までも分断しつつあり、由々しき事態に発展している。

またイランとヒズボラが中東におけるシリアの主たる同盟相手であることから、シリア紛争は、危うい均衡を保つレバノンの勢力図にも打撃を与えている。とはいえヒズボラは、アサド後の政局を視野に入れながら、将来的に自国の政策をどのように調整すべきかを抜け目なく計算しているふしがある。トルコでは、シリア危機を機に政府の対外政策や国益における倫理の役割について見直しや再検討が迫られている。またクルド問題やその対応のあり方をめぐっても緊張が生じており、トルコに対する評価の低下を招いている。この傾向は深刻な宗派間分裂を抱える国で特に顕著である。さらに紛争地帯から大勢の難民がトルコに流入していることが国内事情を悪化させ、トルコ経済やトルコ南東地域の問題の深刻化に拍車をかけている。イスラエルの場合、シリア関連の重大事項として次の三点が挙げられる。一つ目はアサド政権に代わってイスラーム政権が樹立される可能性であり、二つ目はヒズボラがシリアの化学兵器を入手するのではないかと懸念である。三つ目は、イスラエルがこれまで、イランとの関係を通してこの地域の動向を読んできたことに関連する。現体制が崩壊すれば域内のイランの影響力が弱まる可能性があり、そうなればイスラエルにとって歓迎すべき事態である。パレスチナの場合、ハレド・メシャルがダマスカスからドーハに拠点を移し、ハマスとシリア政権の繋がりが弱まった結果、パレスチナ政府はPAとハマスの間で分裂し、ガザの政治は欧米から一層遠ざかったと考えられている。

シリア紛争におけるロシアの利害

ロシアは武器の供給から幅広い外交活動に至るまで、様々な形でシリア紛争を支援してきた。これまでも外交活動を通じ、安全保障理事会を活用してシリアに圧力をかけようとする動きを封じこめることに成功し、また幾度となくアサド政権の時間稼ぎに貢献している。こうした活動は、外交の場でこの国を孤立させ、アサド後のシリアや中東全域で今後ロシアが本来の役割を果たせるかどうか危ぶまれる事態を招いている。シリア紛争に対するロシアの立場は、この国の権力観や権威観と深く結びついている。つまりシリア関係において、ロシアは物質的な利害関係は二の次としか考えておらず、むしろ自国が掲げる価値観の方を優先しているのである。こうした価値観の中心にあるのが、人権とは普遍的性質のものではなく、国家によって与えられるものであるというロシアの理解であり、また国家主権と内政不干渉の重要性は人権保護に勝るとする理念である。ロシアの立場がこうした考えと結びついているのであれば、国際社会から圧力がかけられ、駆け引きが持ちかけられようと、シリアに対するロシアの立場が変わることは考えにくい。またロシアが紛争の有利な解決を望んでいることは確かであるが、その関心は、紛争解決の結果ではなく、むしろ解決の過程の方に向けられているのである。



難民保護の問題

新たな不穏地域から派生した紛争が飛び火する可能性や、当事者や関係国間の緊張が拡大する可能性とは別に、中東では長期化するパレスチナやアフガニスタンの紛争が今も地域の安全保障を脅かす問題となっている。問題の一つが、パレスチナ難民の保護である。パレスチナ難民問題は共通した一つの問題と考えられがちであるが、現実には、難民キャンプをめぐる状況は千差万別であり、地域の新たな緊張が、難民キャンプの日常生活や管理のあり方に一層大きな格差を生み出すことが予想されている。こうした難民保護の問題に向き合うためには、統治、被統治能力、人間の安全保障という観点も含め、それぞれのキャンプをより包括的に理解し、管理することが必要である。シリア市民暴動はじめ、域内で新たに勃発する問題が、周辺国の難民キャンプで暮らすパレスチナ人をさらなる脅威にさらしている。イラクの事例のように難民が過激派のターゲットにされる恐れや、再定住を余儀なくされる可能性もある。またパレスチナ難民がレバノンのキャンプに移動することになれば、既に貧困と不安が蔓延するキャンプの惨状がさらに悪化することも懸念される。

アフガニスタン紛争の長期化を受け、EUに流入するアフガニスタン難民の数が年を追うごとに増加しており、難民保護と、欧州・中東双方の安全保障の前に立ちふさがる新たな課題が浮き彫りになっている。難民の早期帰還や、警察による現状把握調査等の結果、欧州に新たな社会的弱者集団が誕生し、人間の安全保障が脅かされている。若者を避難に追いやった社会不安は欧州にも存在しており、紛争地帯と欧州の緊張関係がそのまま持ちこされている。英国で行われた数々の面談調査からも分かるように、若いアフガン人男性の移民はジハード集団の一員というレッテルを貼られ、欧州のほとんどの警察当局から忌避される存在となっている。彼らをめぐる状況を調査した結果、明らかになった重大な事実が二つある。一つは、若い男性の方が女性よりも弱い立場にあるという男女逆転の格差現象が生じていること、もう一つは、EUの行動と政策の不一致が原因で、こうした集団がますます弱体化する可能性があるということである。

Session 3: Security in the Gulf (湾岸地域の安全保障)

今日の湾岸地域には、武力衝突の解決や地域の保護に資する信頼性の高い局所的・地域的集団安全保障制度が依然欠如している。1970年から1980年代にかけて、湾岸地域の安全保障制度は不安定ながらも「勢力バランス」を維持していた。しかしイラク軍撤退と共にこのバランスは崩壊し、地域は二つの大きな戦争に巻き込まれてゆく。さらにポスト冷戦時代には、従来からの脅威に加え、新たに生じた危機がこの地域を襲うことになる。今や湾岸地域は一触即発の状況にあり、紛争緩和のための新たなメカニズムと安全保障に対する見直しが必要になってきている。



安全保障に関する最重要問題の一つが、2002年来のイラン核兵器開発疑惑である。この疑惑は反体制派組織MKOがイランの核兵器開発の目論見を暴露したことにより明るみに出たもので、イランと欧米諸国との交渉が暗礁に乗り上げているという状況と相まって、紛争緩和の大きな障害となっている。その中心にあるのは、イラン政府の曖昧な態度と、イランの脅威を煽るアメリカのプロパガンダの二点である。イランの曖昧な対応は、核兵器開発疑惑をめぐる国際社会の懸念を一層深めている。

アメリカとイランの外交関係は1970年代の在イラン・アメリカ大使館人質事件に伴う国交断絶以来膠着状態にあるが、そこには多くの要因が絡んでいる。人質事件に端を発する不信感もその一つであるが、両国の交渉を妨げているのはそれだけにとどまらない。2003年にサダム・フセインが失脚して以来、イランはシリアと並んで、中東随一の反米勢力に名乗りを上げた。しかしシリアは「アラブの春」以降内戦に突入し、統治は崩壊してしまう。結果として中東で反米を掲げる国はイランただ一国になってしまった。こうした中アメリカはイランに対する経済制裁の強化に乗り出し、特に過去二年間はこの方針を強力に押し進めた。その結果イランのウラン濃縮政策は民衆の支持を失いつつある。アメリカの経済制裁が反政府活動の行く末を左右する可能性もある。

シリア紛争の余波を受けて、イラク、レバノン両国で宗派間対立が激化しているが、こうした事態は現行の中東統治体制を解体する可能性をはらんでいる。イランは現宗派間紛争の過程に大きくかかわってきたため、対立が激化すればその影響を被る公算が高い。これに対し、イランの核武装の脅威が原因で、中東の諸問題をめぐる様々なステークホルダー間の対立が深まることは考えにくい。むしろこれまで政治的、経済的、社会的リソースの配分にかかわり、今後もこうした役割を担ってゆく様々な非国家社会主体や非国家政治組織が多くの方面で自律的に活動を推進し、その結果政治的、社会的変容が生じていると考える方がより現実的だろう。

先に見えるイランの核開発問題は、中東の紛争をいかに緩和・防止するかという問いにとってさほど重要ではない。湾岸地域の紛争防止・緩和の要となるのはむしろ、リソースへのアクセスとその配分、社会が民主主義体制へ穏健に移行するためのメカニズム、そして地域政策とグローバル政策のあり方なのである。

Session 4: The Role of Non-state Actors in Conflict Mitigation toward the More Inclusive Systems (紛争緩和のために非国家主体が担うべき役割：より包括的な制度構築に向けて)

レバノンのヒズボラ

レバノンのヒズボラ（神の党）は、多元的なイスラーム運動組織として広く知られており、社会運動組織、武装集団、政党、NGOとして幅広い活動を展開している。ヒズボラ研究といえば、その政治的行動や軍事的行動を対象としたものがほとんどであるが、今特に注目すべきなのは、レバノンの社会運動や共同体建設を目指す包括的な仕組みとしてのヒズボラの方ではないだろうか。この集団は、いわゆる「抵抗社会」という大義の下で社会運動を展開してきた。この言葉はもと、欧米の植民地支配とイスラエルの侵略に対する民衆抵抗を表すヒズボラの基本理念であったが、今では汚職、独裁、疾病、環境破壊等、あらゆる問題に対する抵抗という意味合いを帯びている。新たな意味をまとったヒズボラの抵抗運動は共同体を団結させ、民衆（特に下位中流階級）に参加の途を開いている。こうしてヒズボラの下には続々と支持者が集まり、指導者の一声で行動を起こす体制を整えている。欧米のメディアはヒズボラの支持者を「多分に同質的な集団」あるいは「狂信者」と伝えているが、実際にはそのメンバーは決して一枚岩ではなく、様々な思惑を持ってヒズボラの活動に参加しているのが現状である。さらに支持者の間では、ヒズボラの宗教的、政治的、軍事的立場よりも、むしろ社会活動や共同体建設活動の方に共感している者が多数を占めている。「抵抗社会」戦略を掲げてはいるが、ヒズボラの支持者をテロリスト予備軍または狂信的な反体制派と決めつけるのは間違いだろう。

ムスリムの市民社会

昨今、ムスリムの市民社会は人道援助や開発援助に力を入れている。ムスリム系のNGOがサービスを提供したりプロジェクトを組織するなど国境を越えて活躍しており、ムスリム社会だけでなく、援助を必要としている非ムスリム社会にも支援の手を差し伸べている。トルコを本拠とするNGOであるIHHや、人権基金、自由人道援助基金等のグループや、キムセヨクム連帯・援助協会をはじめとする支援団体がますます活躍の場を広げ、国際援助機関の取組を継承、補完するとともに、世界各地で紛争緩和の支援に当たっている。



このうちIHHはガザに常設の事務所を開設し、人道援助や開発の領域で国境を越えた支援活動を展開している。人道援助活動の例としては、ガザ地区の孤児に対する経済支援、奨学支援、緊急医薬品の支給、トルコの病院に収容されたパレスチナ人負傷者の治療等が挙げられる。また開発の領域では、バイト・ハヌーン病院建設等のプロジェクト支援や、医師の育成、老朽化した大学研究室の建て替えの手配と資金援助等を行うとともに、水道整備や削井等のインフラ関連プロジェクトの調整にも携わっている。この組織の活躍ぶりからも、ムスリムの価値観の下で活動する市民社会組織が、新たな人道・開発援助機関として中東で頭角を現していることが良く分かる。

非国家主体、とりわけ政治や軍事と一線を画す団体の存在は、これまで中東紛争というテーマにとってさほど重要視されてこなかった。しかし中東の紛争防止・緩和を実現するために社会に支持される新たな方策が模索される今、こうした主体はますますその存在感を高めつつある。

(JSPS Scholar, Doshisha University, Elisa Montiel Welti)

公開講演会

オマーンのイスラーム法学者たちの試みー穏健主義の展開に対して The Effort of Muslim Scholars in Oman in the Deployment of Moderation

講 師：カーハラン・アルハルスィー（大ムフティー補佐、基金・宗教局担当大臣、オマーン）

コメンター：四戸 潤弥（同志社大学神学部・神学研究科教授）

日 時：2012年11月12日（月）17:00-19:00

会 場：同志社大学今出川キャンパス 寧静館5階会議室



アラビア半島に位置するオマーンの大ムフティー補佐、基金・宗教局担当大臣であるカーハラン・アルハルスィー氏により講演が行われた。講演題は「オマーンのイスラーム法学者たちの試みー穏健主義の展開に対して」である。

氏は三つの観点を提示して講演を始めた。すなわち、穏健主義、オマーン、イスラーム法学者の試みである。講演の構成は主に四つの段階からなる。すなわち、1) オマーンの地理・歴史、2) 中庸の定義、3) 中庸のルーツ、4) 現代のオマーンである。

1) オマーンの地理・歴史：オマーンは地政学的にも戦略的にも重要な位置にある。地理的には、アラビア半島南東端に位置し、オマーン湾、アラビア海に面し、その向こうにはインド洋が広がる。その地理条件から、古代から交易国家として独立し、独自の文明を営んできた。西暦629年には、イスラームを受け入れた。ただし、戦争によってではなく、ムハンマドからイスラーム信仰を勧める手紙を受け取ったことをきっかけに、当時の王族らが国内で議論をした結果、平和裏に信仰することを決めたという。

2) 中庸の定義：オックスフォード英語大辞典の中庸の定義を挙げて説明があった。それによれば、中庸とは理性的であり極端ではないことである。ただし、中庸さは文面ではなく結果としての行動によって判断されるとして、現代オマーンについて説明が行われた。

3) 中庸のルーツ：オマーンの中庸のルーツは以下の四点に基づく。すなわち、宗教、文明化、知識と教育、国王の主導である。一点目の宗教について、中庸はイスラームの教えに基本原理として含まれる。イスラームは、他者に対し寛容さと多様性を認めている。クルアーンに根拠がある。二点目の文明化について、伝統的な制度とそれに基づく安定した国家運営が挙げられる。それにより、交易が維持され交流が広まり、様々な地域や人びととの対話が維持される。三点目の知識と教育については、道徳と倫理に関する伝統の遺産を基礎にして、新しい問いについてオマーンの人々に相応しい形で答える取り組みが日々為されている。この点に関し、イジュティハードがある。イスラームの基本的教えがある一方で、日々新しい問題、新しい出来事が起こる。それに対しどのようにイスラームの教えのもとに対応すべきかを理性的に明らかにする努力が為されている。その役割をおもにイスラーム法学者が担っている。この努力について、無知こそが最も否定されるべきもので、常に知識に対し開かれ且つ学ぶことのできる環境のあることが、極端さを無くし、寛容を生む基礎になっている。四点目について、現代オマーンの国づくりは、カブース現国王の主導に基づいており、重要な点である。オマーンはスルターン制であるが、一種の議会である諮問議会が設置され、さらに国王は各地を巡って国内事情を把握している。また、現在の経済の発展も現国王の政策の成果である。



4) 現代のオマーン：以上のような背景をもとに、現代オマーンにイスラームに基づく寛容の深い伝統がある。オマーン人は、道徳的かつ友好的で、古くから世界各地との交流の記録がある。たとえば日本、中国、インド、西アフリカにまで、オマーン人は敬意をもって受け入れられてきた。また、最後には、昨年の東日本大震災に対するオマーンの支援について触れ、オマーンと日本の強い繋がりを知ってほしいと述べた。その後、同志社大学の四戸潤弥教授によるコメントがなされ、質疑では活発な質問が出された。例えば、オマーンの穏健路線が現国王の主導によるため、将来の別の国王がこの路線を止めることはあり得るのかについてである。これに対しては、国王の判断は伝統と現代の情勢に基づいて決められるため、単に国王の独断で決まるのではないとされた。また、ムフティーの決定権や政治・社会への影響力について質問があった。

(CISMORリサーチアシスタント 藤本憲正)

公開講演会

イラン・イスラム共和体制とは？

講 師：駒野 欽一（前駐イラン日本大使）

日 時：2012年11月24日（土）13:30-15:30

会 場：同志社大学今出川キャンパス 神学館3階礼拝堂

本講演において駒野氏は、イラン理解のためにイラン・イスラム共和体制を三つの点から分析された。第一に現在のイラン・イスラム共和体制の形成はホメイニ師の考え方と共に、過去三分の一世紀に経験してきた様々な出来事の影響が大きい。それは宗教界、革命ガード、政府、「国民」の四者に支えられており、まず宗教界はホメイニ師の存在ゆえにという面はあるが、彼亡き後、その基本的な役割は彼の時代に完成した体制の護持であり、またイランで三権の他の二権と並んで大きな権限を持つ司法権を握っている。次に革命ガードはイラク戦争を戦った革命組織の代表的存在である。それらは志願兵を募り戦闘を担ったほか銃後での支援も行い、現体制を軍事面、治安面、経済面、政治面で支える集団となっている。またそれらは最高指導者の指揮下にある。そして政府は石油収入を中心とする巨額の資金を使う立場にあり、最大の雇用主、そして最大のシンクタンクでもあるため自らの志向する方向に政策策定が出来る能力を持つ。この政府の長たる大統領の権限は非常に大きいため、彼の考えが重要になる。最後に「国民」とは必ずしも全国民ではなく、戦時には戦場に行き、金曜礼拝に参加し、最高指導者の訴えに応じて行動する人達を指す。その支持に現体制は依拠するゆえに最高指導者も大統領もその心を掴む努力をしている。



第二に彼らの世界観、宗教観、アイデンティティの問題が重要である。最高指導者と大統領が繰り返し述べる世界観では、米国など西側世界が経済的にもモラル的にも衰退の一途にあるのに対し、イランはイスラームという宗教を持ち、革命の原則を固持してきた結果、独立と経済産業面での発展を成し遂げ上昇の一途とされる。それでこのイランの成功に西側は我慢ならず、あらゆる攻勢を仕掛けて潰しにかかっている。ゆえにイランはこれまでの原則を曲げず最大限の努力を続けることでこの攻勢に対抗しなければならないとする。次に宗教観だが、イランはシーア派のリード国である。スンニ派とは異なりシーア派は法だけでなく内的精神としての宗教を重視する密教的な宗教である。また神と自分との直接的な関わりを求める姿勢が強いようである。そしてイランでは神と預言者ムハンマドに加え、預言者の娘婿アリーの血統の12人の指導者達が重要で、特にお隠れになった12代目イマームが再び姿を現すことを待ち望み、それまではイスラーム法学者が世を統治すると考えている。この再臨をめぐって大統領の周辺の人々と宗教界との間で対立が起こるなど、宗教観の対立は大統領派と反大統領派との権力闘争の一側面ともなった。そしてアイデンティティの問題だが、イランは多民族国家であり、長い歴史を有し、イスラーム以前の豊かな文化・文明もあるため、その伝統に基づく民族主義がある。同時に7世紀以降はイスラームに改宗し、現在はそのに基づく社会作りをしているためイスラームの存在は非常に大きい。このイラン民族主義とイスラーム主義はしばしば対立の底流をなし、大統領派と反大統領派の権力闘争にはこの側面もある。

第三にこのような社会で起こることとしてまず権力闘争が不可避である。宗教観、アイデンティティの分裂があり、最高指導者や大統領と、西側との友好関係を願う改革派とは理念も異なる。また経済の民間主導が進まない中で政府の力が増大し、



大統領の権限が非常に大きいことも権力闘争の繰り返しを生む。前回の大統領選挙では改革派の盛り上がりに対し最高指導者の下にある保守原則派と大統領派がそれを潰すために一致団結をした結果、改革派支持の国民の考え方は変わらないものの、組織的には完全に抑えられてしまった。しかし共通の敵が姿を消すと、団結していた大統領派とその対抗勢力の分裂が生じ、そのあとは大統領派をある程度追いつめた人々の間で対立する現象が起きた。しかしそれで体制が崩壊へ向かうわけではない。体制護持をその最大の役割とする宗教界は日頃から「国民」の支援や鼓舞をすることで必要な時に彼らを動員して反対勢力を力で抑えると共に、司法権や治安組織が反対派を徹底的に抑える役割を果たしている。このようなメカニズムを通して体制護持のバネが働くことに加えて、体制護持のためには原理原則をも曲げて柔軟に対応する面もある。例えばイラン・イラク戦争ではフセイン打倒を大原則としていたが、実際には資金や志願兵の不足、アメリカ参戦の徴候などから体制の危機に直面して、その目的を達することなしに停戦を受け入れるという柔軟性も見せた。そして最後に現在の核問題について駒野氏は、今後の状況の展開如何によってはイランがドラスティックな譲歩を示すこともあり得るのではないかと指摘し、講演を締めくくった。

講演会の後、非公開で行われた研究会では核問題の動向やイスラエルとの関係などをめぐって参加者による活発な議論が展開された。

（CISMOR特別研究員 朝香知己）

公開講演会

古代イスラエルにおける一神教と神の再定義 Monotheism and the Redefinition of Divinity in Ancient Israel

講 師： マーク・S・スミス（ニューヨーク大学ヘブライ・ユダヤ学科教授）

日 時： 2012年12月15日（土）13:00-15:00

会 場： 同志社大学今出川キャンパス 神学館3階礼拝堂

一神教は、一般的に唯一の神への信仰として定義され、古代イスラエルの宗教の特徴であると認識されてきた。聖書的伝統の一神教はモーセの十戒にまで遡る。そこには、「あなたは、わたしをおいてほかに神があってはならない」（出エジプト記20:3、申命記5:7）と記されている。しかしスミス氏は、多くの学者は、聖書における初期の一神教が、ヤハウェに優先する他の神々を認めないことを強調し過ぎてきたのだと言う。

「一神教」という用語は、ヘンリー・モア（Henry More）の1660年の著書における造語であると考えられている。「多神教」という用語はより古く、アレクサンドリアのフィロン（Philon Alexandrinus）によって造り出され、1580年にフランスで無神論との関連で、ジャン・ボーダン（Jean Bodein）がはじめて近代的語彙に取り入れたと考えられる。一神教は、宗教を分類する学術的努力を支えてきた。諸宗教は、神の形態によって諸形式に分類され、これらの形式は相対的な価値や重要性を割り当てられたのであり、一神教は宗教の最高の形態とされた。このアプローチはしかし、近年、疑問視されるようになった。スミス氏は、その理由として次の七点を挙げて論じられた。

第一に、「一神教」という用語は、聖書の、あるいは古代近東の用語ではなく、近代におけるアナクロニズムである。聖書の分野では、古代文明への入口として役立て、近代と古代の文脈との間の隔たりと相違の批判的感覚を獲得するために、アナクロニズム的ないくつかの用語を用いる。それは、古代の文明本来の理解（人類学者がemicと呼んだもの）と、その本来の理解の近代的解釈（etic）との違いを明らかにするのに役立つ。第二に、一神教という用語は、西欧的宗教とくにキリスト教の優越性を擁護するために用いられた。一神教という言葉は、古代イスラエル社会と他の社会の中の多神教を攻撃することを目的とした論争的修辞として現われたのである。第三に、一神教と多神教という用語は、古代のデータにおいてあまりにも鋭い対照として描かれている。古代の多神教の中に何らかの「mono（一）」が存在し、一神教の中にも何らかの「poly（多）」が存在している。第四に、それは、神の現実やそれに結びついた実践をもたらす社会的政治的文脈についての十分な配慮がなされていない。一神教は、卓越した考えとして表現されたり讃美されたりするべきではなく、現実のより複雑な理解と社会的宗教的実践に対応する、より広い宗教的文化的文脈において理解されるべきである。

第五に、一神教は定義するのが難しい。それは宗教的信念として、また「崇高な考え」として捉えられ、一神教的な伝統として特徴づけられてきたのである。第六に、古代イスラエルの宗教のうちに他の神々が存在するので、古代イスラエルが真に一神教であるという主張は不適切である。この異議は、最近の議論において影響力を増してきている。第七に、一神教的であると主張された聖書の文書は真に一神教的なのか？この用語に対しては真剣な異議があり、限界がある。聖書的一神教は、「一人の神」説の新アッシリアおよび新バビロニアの帝国主義的一神教の主張に対応する形で出てきたのではないかと考えられる。

上記のことから、次のように結論付けることができるであろう。イスラエルの一神教は、単により古い伝統的なヤハウェエルのプロフィールを再定義するのみならず、神そのものをも再定義する。古代イスラエルにおける神について言われることは、イスラエルの唯一神のみである。他の神々は省かれてしまった。太陽、月、星たち、御使いたちも、もはや低レベルの神々ではなく、宇宙的水（cosmic waters）も神聖なものではなく、創造されたものであり、ヤハウェとはまったく別のもの、神格的ではないもの、幻想以外の何物でもないものと考えられるようになった。

聖書の中に表現されているものは、唯一の神の現実を構成している。それは、神の名称や権限を唯一の神に集中させるというような単純なものではない。神は、さまざまな特徴をもつがゆえに、優れた神であるということではない。この神は、初期の解釈に比べて、より優れた神であり、より人間性を増してきているということが、他の神々との比較において言える。古代イスラエルの神に関して大変革があったとするなら、それは、単純に神の役割や機能を一つにまとめてしまったということではなく、個性の部分や人間的な役割の部分において拡大されている点にあるということが言えよう。

（CISMORリサーチアシスタント 佐藤泰彦）



◆ 2012年度後半活動報告 ◆

主催 講演会/シンポジウム/研究会/会議

●国内開催●

2012年10月5日(金)～7日(日)

【第6回CISMORユダヤ学会議】

「ヘブライ語文化の復興—現代ユダヤ教における意義・日本文化との関係(The Revival of Hebrew Culture in the Context of Modern Judaism and in Relation to Japan)」

共催：神学部・神学研究科、駐日イスラエル大使館

<10/5>

映画上映会

「The Human Resources Manager」

講師：三宅 良美(秋田大学教授)

質疑応答：A. B. Yehoshua (Israeli Novelist)

<10/6>

公開講演会

「イスラエルのアイデンティティ：神話から歴史へ」

講師：A. B. Yehoshua (Israeli Novelist)

非公開研究会

「ヘブライ文学：作家と研究者係」

発表：A. B. Yehoshua (Israeli Novelist)

Nitza Ben-Dov (Professor of Haifa Univ.)

村田 靖子(東邦大学教授)

<10/7>

非公開研究会

「日本におけるヘブライ文学とユダヤ学」

発表：高尾 千津子(立教大学教授)

赤尾 光春(オックスフォード大学客員研究員)

細田 和江(中央大学政策文化総合研究所準研究員)

公開講演会

「ヘブライ文化：言葉と遍歴の世界」

講師：Nitza Ben-Dov (Professor of Haifa Univ.)

非公開研究会

「日本語からヘブライ語への翻訳」

発表：Doron B. Cohen(同志社大学講師)

Michal Daliot-Bul (Assistant Professor of Haifa Univ.)

2012年11月12日(月)

公開講演会

「オマーンのイスラーム法学者たちの試み—穏健主義の展開に対して(The Effort of Muslim Scholars in Oman in the Deployment of Moderation)」

講師：Kahlan Nabhan Al-Kharusi (Assistant Grand Mufti /

Ministry of Endowment and Religious Affairs, Oman)

コメント：四戸 潤弥(同志社大学神学部神学研究科教授)

2012年11月24日(土)

公開講演会・非公開研究会

「イラン・イスラーム共和体制とは？」

講師：駒野 欽一(前駐イラン日本大使)

2012年12月15日(土)

公開講演会

「古代イスラエルにおける一神教と神の再定義(Monotheism and the Redefinition of Divinity in Ancient Israel)」

講師：Mark S. Smith (Professor of New York Univ.)

非公開研究会

「Questions about Monotheism in Ancient Israel

: Between Texts and Archaeology」

発表：Mark S. Smith (Professor of New York Univ.)

Elizabeth Bloch-Smith

(Associate Professor at Union Theological Seminary)

コメント：越後屋朗(同志社大学神学部神学研究科教授)

馮 耀榮 (Associate Professor of Alliance Bible Seminary)

2013年2月9日(土)

公開講演会

「『アマルナ』前夜のエジプト

—アメンヘテプ3世治世末期のテーベ」

講師：近藤 二郎(早稲田大学文学学術院教授)

共催：日本オリエント学会

2013年2月16日(土)

国際会議

「Peace and Security in the Middle East

: Alternative Ways to Democratization」

共催：グローバル・スタディーズ研究科

科学研究費補助金『中東における紛争防止の学際的研究の構築』(研究代表者：中西久枝)

2013年3月1日(金)

Joint Workshop

「Shariah, Governance and Interreligious Relations」

共催：マレーシア国際イスラーム大学

●国外開催●

2012年8月27日(月)

【頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム】

国際WS in イスラエル、エルサレム

「Interpretations of Traditions

: Maimonides, Spinoza, Buber, Levinas and After」

会場：ヘブライ大学ロスバーク・インターナショナル・スクール

共催：ヘブライ大学人文学部

2012年11月8日(木)～9日(金)

国際会議 in トルコ、イスタンブール

「Conflict Prevention in the Middle East

: Searching for Alternative Ways」

会場：トルコ、イスタンブール旧総領事館事務所

共催：グローバル・スタディーズ研究科
在イスタンブール日本国総領事館

2012年12月10日（月）

国際セミナー in アメリカ、ワシントンD. C

「A Wide-Angle View of U.S.-Japan Relations
: Religion, Energy, and Domestic Politics」

会場：アメリカ、カーネギー平和財団

共催：日米研究インスティテュート（USJI）

Carnegie Endowment for International Peace

会場：エジプト、カイロ大学

共催：カイロ大学オリエンタルスタディーズセンター

2013年2月28日（木）

【頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム】

共催セミナー in 英国、ロンドン

「Land and People in Jewish Writings
and their Interpretations」

会場：英国、レオバックカレッジ

共催：レオバックカレッジ

2013年2月19日（火）～20日（水）

国際会議 in エジプト、カイロ

「Values in Religions」

◆ 来訪者記録 ◆

年／日	氏名	所属機関・役職
2013/03	Azman Ahmad	Assistant Vice Chancellor & Vice President of Academic Affairs, Universiti Brunei Darussalam（ブルネイ）
	Osman Bakar	Director & Chair Professor, Sultan Omar 'Ali Saifuddien Centre for Islamic Studies (SOASCIS), Universiti Brunei Darussalam（ブルネイ）
	Michael Feener	Associate Professor, National University of Singapore（シンガポール）
	Abang Hadzmin bin Abang Taha	Dean of the Faculty of Arabic Language and Islamic Civilization, Islamic University of Sultan Sharif Ali（ブルネイ）
	Haslina Binti Ibrahim	Assistant Professor, International Islamic University Malaysia（マレーシア）
	Shafiq Flynn	Ph. D candidate, International Islamic University of Malaysia（マレーシア）
	Roslizawati Binti Mohd Ramly	Ph. D candidate, International Islamic University of Malaysia（マレーシア）
2013/02	Nurşin Güney	Professor, Department of Political Science and International Relations, Yıldız Technical University（トルコ）
	Norman Cook	Former Executive Policy Director in Charge of the Middle East and Africa at CIDA（カナダ）
	Peter Wagner	Research Fellow, Hungarian Institute of International Affairs（ハンガリー）
	立山 良司	防衛大学校 国際関係学科 教授
	近藤二郎	早稲田大学文学学術院 教授、早稲田大学エジプト学研究所 所長
2012/12	Elizabeth Bloch-Smith	Associate Professor, Union Theological Seminary（米国）
	Mark S. Smith	Skirball Professor, New York University（米国）
2012/11	駒野 欽一	前駐イラン日本大使
	Kahlan Nabhan Al-Kharusi	Assistant Grand Mufti（オマーン）
2012/10	Abraham B. Yehoshua	Israeli Novelist（イスラエル）
	Nitza Ben-Dov	Professor, University of Haifa（イスラエル）
	Michal Daliot-Bul	Assistant Professor, University of Haifa（イスラエル）
	Nissim Ben Shitrit	駐日イスラエル特命全権大使
	Nir Turk	駐日イスラエル大使館文化・科学技術担当

発行 同志社大学 一神教学際研究センター（CISMOR）
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
TEL 075-251-3972 FAX 075-251-3092 E-mail: info@cismor.jp
編集 CISMOR事務局編集部 デザイン協力 高田 太
印刷 中西印刷株式会社